

《論 文》

古英語強変化動詞 6 類について

森 基 雄

強変化動詞 1 ～ 5 類では時制の変化における母音交替は究極的にはすべて印欧祖語のアプラウトの基本パターンである IE $e \sim o \sim \text{ゼロ}$ にさかのぼると考えられるのに対し、今回取り上げる 6 類の語根母音は Gmc a （現在） $\sim \bar{o}$ （過去単数） $\sim \bar{o}$ （過去複数） $\sim a$ （過去分詞）というパターンであり、さらに Gmc a は IE o （ $< o, X_3e$ ）、 a （ $< X_2e$ ）、 X （ $= X_1, X_2, X_3$ ）に、そして Gmc \bar{o} は IE \bar{o} （ $< \bar{o}, oX, eX_3$ ）、 \bar{a} （ $< eX_2$ ）に対応する。これは IE $e \sim o \sim \text{ゼロ}$ という基本パターンからは一見大きく逸脱した交替に見えるが、本稿ではこの 6 類の起源と発達について、その多くの実例を通して論じていくことにしたい。

6 類

Gmc $aC \sim \bar{o}C \sim \bar{o}C \sim aC$: OE *faran* ‘to go’ $\sim \text{f\ddot{o}r} \sim \text{f\ddot{o}ron} \sim \text{faren}$, *færen* (OS *faran* $\sim \text{f\ddot{o}r} \sim \text{f\ddot{o}run} \sim \text{gifaran}$, OHG *faran* $\sim \text{fuor} \sim \text{fuorun} \sim \text{gifaran}$, ModHG *fahren* $\sim \text{fuhr} \sim \text{fuhren} \sim \text{gefahren}$, Go *faran*) ; OE *alan* ‘to grow’ $\sim \bar{o}l$ (ON *ala* $\sim \bar{o}l \sim \bar{o}lu \sim \text{alinn}$, Go *alan*) ; OE *bacan* ‘to bake’ $\sim \text{b\ddot{o}con} \sim \text{bacen}$ (OHG *bachan*, *bakkan* $\sim \text{buochun} \sim \text{gibachan}$, *gibakkan*, ModHG *backen* $\sim \text{buk} \sim \text{buken} \sim \text{gebacken}$) ; OE *calan* ‘to be cold’ $\sim \text{c\ddot{o}l} \sim \text{calen}$ (ON *kala* $\sim \text{k\ddot{o}l} \sim \text{k\ddot{o}lu} \sim \text{kalinn}$) ; OE *galan* ‘to sing’ $\sim \text{g\ddot{o}l} \sim \text{g\ddot{o}lon} \sim \text{galen}$ (OHG *galan* $\sim \text{guol}$, ON *gala* $\sim \text{g\ddot{o}l} \sim \text{g\ddot{o}lu}$

~ galinn) ; OE grafan ‘to dig’ ~ grōf ~ grōfon ~ grafen (OS graban ~ grōbun, OHG graban ~ gruob ~ gruobun ~ gigraban, ModHG graben ~ grub ~ gruben ~ gegraben) ; OE hladan ‘to lade’ ~ hlōd ~ hlōdon ~ hladen (OS hladen, OHG ladan ~ luod ~ luodun ~ giladan, ModHG laden ~ lud ~ luden ~ geladen, 過去分詞 Go afhlāpans) ; OE sacan ‘to strive’ ~ sōc ~ sōcon ~ sacen (OS sakan ~ sōk ~ sakan, OHG sahhan ~ suoh ~ suohhun ~ gisahhan, Go sakan ~ sōk ~ sōkun ~ sakans) ; OE wadan ‘to go’ ~ wōd ~ wōdon ~ waden (OHG watan ~ wuot ~ wuotun ~ giwatan, ModHG waten) ; OE gnagan ‘to gnaw’ ~ gnōgon ~ gnagen, gnægen (OHG gnagan ~ gnuog ~ -gnagan, ModHG nagen) ; OE dragan ‘to draw’ ~ drōg ~ drōgon (OS dragan ~ drōg ~ drōgun, OHG tragan ~ truog ~ truogun ~ gitragan, ModHG tragen ~ trug ~ trugen ~ gitragen, Go dragan) ; OE scacan, sceacan ‘to shake’ ~ scōc ~ scōcon ~ sceacen (ON skaka ~ skók ~ skóku ~ skekinn) ; OE scafan, sceafan ‘to shave, scrape’ ~ scōf ~ scōfon ~ scafen (OS skaban, OHG skaban ~ giskaban, ModHG schaben, ON skafa ~ skóf ~ skófu ~ skafinn, Go skaban ~ skabans) ; OE spanan ‘to allure’ ~ spōn ~ spōnon ~ spanen (OS spanan ~ spōn ~ spōnun ~ spanan, OHG spanan ~ spuon ~ spuonun ~ gispanan)。

そしてまず faran を例に、現在時制について見ていくことにする。

faran の現在時制

	直説法	假定法	命令法
単数 1 人称	fare	fare	
2 人称	fær(e)st	fare	far
3 人称	fær(e)þ	fare	
複数	farap	faren	farap

不定詞	faran
分詞	farende

語根母音の Gmc a はまず鼻音前位置以外では AFB (Anglo-Frisian Brightening、アングロ・フリジア明音化) により、faran と同根である fær ‘journey’ (OHG far ‘Überfahrstelle’, ON far ‘Fahrzeug, Schiff, Weg’) のように æ となるのが本来の発達である。ただし不定詞 faran、直説法と命令法の複数 farap では AFB の結果音 æ が次音節の後母音 a の影響で a に戻った形となっている。従って直説法単数 1 人称、仮定法の単数と複数では語根母音の次音節の母音が e (< æ) であり、命令法単数では何も後続していないことから、これらはそれぞれ語根母音が AFB による æ のままである *fære、*fære、*færen、*fær となるのが本来の発達のはずであるが、実際には不定詞、直説法と命令法の複数からの a に類推的に取って代わられた結果 fare、fare、faren、far となっている。ただし現在分詞の場合、farende のように語根母音の次音節の母音が e であるにもかかわらず語根母音が æ ではなく a となっているのはこうした類推によるものではなく、AFB による語根母音 æ が次音節の a の影響により a に戻る変化が起こった時点では現在分詞の接辞がまだ (POE *-andi >) -ende ではなく i-ウムラウトが起こる前の POE *-andi (OS -andi, OHG -anti, -enti) であったため、不定詞、直説法と命令法の複数と同じく語根母音 æ が a に戻った結果であると思われる。すなわち farende は POE *farandi > (AFB) *færandi > (次音節の a の影響による æ > a の変化) *farandi > (i-ウムラウト) *farændi > OE farende という音過程の結果であったと考えられるのである。

直説法単数 2 人称 fær(e)st (OHG feris(t), ModHG fährst, Go faris)、3 人称 fær(e)p (OHG ferit, ModHG fährt, Go farip) の場合、本来ならば語根母音 Gmc a はまず AFB により æ (*faris、*farip > *færis、*færip)

となり、さらに i-ウムラウトにより e (*fer(e)st, *fer(e)þ) となるはずであるが、不定詞、直説法と命令法の複数、そして現在分詞の影響により、実際に i-ウムラウトの入力となったのは AFB による æ ではなく a であったのである。

同様のことは過去分詞についても言えるであろう。すなわち faren、færen のうち語根母音に a を持つ前者は不定詞、直説法と命令法の複数、そして現在分詞の影響であるのに対し、後者は AFB による æ を忠実に反映する本来の発達形である。過去分詞については同じことが 6 類のすべての動詞に言える。

なお、OE scacan、scafan と並んで sceacan、sceafan という形も見られるのは、語頭子音 sc に後母音 a が後続した場合に渡り音 e が生じたためである。他方、過去分詞で sceacen については、AFB による語根母音 æ が語頭の sc の後位置による二重母音化に起因するという解釈も可能であろう。

6 類には語根母音に後続する子音が単子音ではなく、OE wæcnan ‘to awake’ ~ wōc ~ wōcon ; OE standan ‘to stand’ ~ stōd ~ stōdon ~ standen (OS standan ~ stōd ~ stōdun ~ standan、OHG stantan ~ stuont、stuat ~ stuontun、stuatun ~ stantan、ON standa ~ stóþ ~ stóþu ~ stáþinn、Go standan ~ stōþ ~ stōþun) ; OE wascan、wæscan、waxan (< *waskan) ‘to wash’ ~ wōsc、wōx ~ wōscon、wōxon ~ wascen (OHG waskan ~ wuosk ~ wuoskun ~ giwaskan、ModHG waschen ~ wusch ~ wuschen ~ gewaschen) ; OE weaxan ‘to grow’ ~ wōx ~ wōxon ~ weaxen (Go wahsjan ~ wōhs ~ wahsans、OS wahsan ~ wōhs ~ wōhsun ~ giwahsan、OHG wahsan ~ wuohs ~ wuohsun ~ giwahsan、ModHG wachsen ~ wuchs ~ wuchsen ~ gewachsen) のように 2 子音であるものもあり、中でも wæcnan、standan には森 (2007) で取り上げた frignan、fregna ‘to ask’ の場合と同様、鼻音挿入辞が見られる。weaxan

の語根母音 ea は、AFB による æ が次音節の a の影響による æ > a の変化に先立って後続の hs (> x[ks]) による割れを受けた結果である。

過去時制の語根末子音がヴェルネルの法則を反映するものとしては、縮約動詞 OE slēan ‘to strike’ ~ slōg, slōh ~ slōgon ~ slagen, slægen (OS slahan ~ slōg ~ slōgun ~ slagan, OHG slahan ~ sluog ~ sluogun ~ gislagan, ModHG schlagen ~ schlug ~ schlugen ~ geschlagen, ON slá ~ sló ~ slógu ~ sleginn, Go slahan ~ slōh ~ slōhun) ; OE flēan ‘to flay’ ~ flōg ~ flagen, flægen (ON flá ~ fló ~ flógu ~ fleginn) ; OE lēan ‘to blame’ ~ lōg ~ lōgon ~ lagen (OS lahan ~ lōg, OHG lahan ~ luog ~ luogun) ; OE þwēan ‘to wash’ ~ þwōg ~ þwōgon ~ þwægen, þwagen (OS thwahan ~ thwōg, OHG dwahan ~ dwuog, duog ~ dwuogun ~ gidwagan, Go þwahan ~ þwōh ~ þwōhun ~ þwahans) がある。

現在時制について言えば、例えば不定詞 slēan は WGmc *slahan > (AFB) POE *slæhan > (割れ) *sleahan > (母音間の h の消失) *sleaan > (a の消失、代償延長) OE slēan という音過程の結果であるが、語根末子音 h は命令法単数 WGmc *slah > (AFB) POE *slæh > (割れ) OE sleah、直説法単数 2、3 人称 *slahist、*slahiþ > (AFB) POE *slæhist、*slæhiþ > (割れ) *sleahist、*sleahiþ > (i-ウムラウト、中略) OE sliehst、sliehp には明確に残っている。

前記の faran の場合、語根母音 Gmc a > (AFB) OE æ が次音節の a の影響で a となっているのに対し、slēan は AFB のみを受けた段階の POE *slæhan の æ に、前記の weaxan の場合と同じく次音節の a の影響による æ > a の変化に先立って割れが適用された結果である。同じことは flēan、lēan についても言える。もし逆に割れに先立って次音節の a の影響による æ > a の変化が適用されていたならば、WGmc *slahan > (AFB) POE *slæhan > (次音節の a の影響による æ > a) *slahan > (母音間の h の消失) *slaan > *slān となっていたはずである。しかし現に方言に

よっては (*slahan > *slān >) slā という形も見られ、母音間の h が残る slahae という形も実在した。Campbell (1959: 56) は faran のような語根母音が a である同じ 6 類の他の圧倒的多数の動詞への類推により *sleahan が *slahan に置き換えられたためとしている。他方、極めてまれなケースではあるが、例えば割れを示す meahht ‘might’ に対し maht のように、方言によっては後続の h の影響としては割れではなく a への後退が起こっていることもあることから、Brunner (1965³: 110) は、slā は AFB による æ が後続の h による影響として a への後退を反映するものであり、さなければ北ゲルマン語からの借入語であるとしている。

そして 5 類と同様、6 類にも j- 現在動詞がある（過去時制の語根末子音がヴェルネルの法則を反映する j- 現在動詞については次ページで取り上げる）: OE steppan ‘to step’ ~ stōp ~ stōpon ~ stapen (OS stōp ~ stōpun) ; OE scieppan ‘to create’ ~ scōp ~ scōpon ~ sceapen (OS skeppian ~ skōp ~ skōpun ~ -skapen, OHG skephen (skaphen) ~ skuof ~ skuofun ~ giskaffan, ModHG schaffen ~ schuf ~ schufen ~ geschaffen, Go -skapjan ~ -skōp ~ -skōpun ~ -skapans) ; OE swerian ‘to swear’ ~ swōr ~ swōron ~ sworn、まれに swaren (OS swerian ~ swōr ~ sworan, OHG swerien ~ swuor ~ swuorun ~ gisworan, ModHG schören ~ schwur, schwor ~ schwuren, schworen ~ geschworen, ON sveria ~ sór ~ sóru ~ svarinn, Go swaran ~ swōr) がある。

steppan は Gmc *stapjanan > (重子音化) WGmc *stappjan > (AFB) POE *stæppjan > (i- ウムラウト) steppan という音過程の結果であり、swerian の過去分詞で語根母音に o を有する sworn は 4 類からの影響によるものであり、ごくまれに 6 類本来の swaren も見られる。

scieppan の語根母音 ie は ea の i- ウムラウトの結果であり、さらにこの ea は AFB による語根母音 æ が語頭の sc の後位置による二重母音化に起因する。

j- 現在動詞であり、かつ過去時制の語根末子音がヴェルネルの法則を反映するものとしては、OE *hliehhan* ‘to laugh’ ~ *hlōg* ~ *hlōgon* (OS *hlōgun* ~ *hlagan*, OHG *hlahhen* ~ *hlōc*, ModHG *lachen*, ON *hlæia* ~ *hló* ~ *hlógu* ~ *hleginn*, Go *hlahjan* ~ *hlōhun*) ; OE (**scieþþan* >) *scyþþan* ‘to injure’ ~ *scōd* ~ *scōdon* ~ *sceaðen* (Go *skapjan* ~ *skōþ* ~ *skōþun*) がある。

hliehhan は Gmc **hlahjanan* > (重子音化) WGmc **hlahhjan* > (AFB) POE **hlæhhjan* > (割れ) **hleahhjan* > (i- ウムラウト) *hliehhan* という音過程の結果である。

さらに *hebban* ‘to raise’ ~ *hōf* ~ *hōfon* ~ *hafen*, *hæfen* (OHG *heffen* ~ *huob* ~ *huobun* ~ *gihaban*, Go *hafjan* ~ *hōf* ~ *hōfun* ~ *hafans*, Lat *capiō*) の場合も過去時制の語根末子音 [f,v] はヴェルネルの法則による Gmc, EOE [b] に由来するはずであるが、古英語では Gmc [b] と Gmc [f] は OE [f, v] として融合したため、実際にはヴェルネルの法則による結果は消去され、反映されなくなってしまっている。また不定詞は、(Gmc **hafjanan* >) OHG *heffen*, Go *hafjan* から判断すると、OE *hebban* ではなく Gmc **hafjanan* > WGmc **haffjan* > OE **heffan* となるのが規則正しい発達ではないだろうか。これについて Quirk & Wrenn (1957²: 133-134) はヴェルネルの法則に起因するとしているが、現在時制において特に古高地ドイツ語と古英語の間にこうしたヴェルネルの法則の有無という相違があるケースは他に類例を見出し難く、奇異な例と言わざるを得ない。

次に、Gmc a ~ ō の交替の起源に迫ってみることにしたい。

6 類の現在時制の語根母音 Gmc a は、IE o, a, ə が Gmc a として融合し完全に区別がつかなくなった結果であり、伝統的に ə と見なされていたものは実は喉音 X の反映であったとされる。現在時制の語根母音 Gmc a を① IE o に由来するもの、② IE a に由来するもの、③ IE X に由来するものに分類し、それぞれ少しずつ例を挙げてみると：① OE *faran* (Gk

porēuomai ‘reise’), ② OE *alan* ‘to grow’ (Lat *alere*) ; ON *aka* ‘to drive’ (あいにく古英語にはこれに対応する実例は見られない) ~ *ók* ~ *óku* ~ *ekinn* (Lat *agō*, Gk *ágō* ‘führe’, Skt *ajati* ‘treibt’), ③ OE *standan* ‘to stand’ < IE *stX₂-n-t- (OE *stede*, Go *staps* ‘place’, Lat *statim* ‘auf der Stelle’, Gk *stásis*, Skt *stithi*- ‘Stand’ < IE *stX₂-ti- と同根)。

現在と過去におけるこの Gmc *a* ~ *ō* の交替に対応するかのように見える他の語派の実例としてまず考えられるものは、ラテン語の現在と完了の *scabō* ‘scratch’ ~ *scābī*, *fodiō* ‘dig’ ~ *fōdī* のような交替である。しかし Lat *a* ~ *ā* が例えば IE X₂ (ゼロ階梯) ~ eX₂ (e- 階梯) であるのか、あるいは IE X₂e (e- 階梯) ~ X₂ē (延長階梯) であるのか、また Lat *o* ~ *ō* が IE *o* (o- 階梯) ~ *ō* (延長階梯) であるのか、あるいは IE X₃e (e- 階梯) ~ X₃ē (延長階梯) であるのかなど、正確な階梯が特定されない限り、こうした例を真に印欧祖語にまで遡り、かつ 6 類の Gmc *a* ~ *ō* の解明につながる本来のアプラウトとして扱うことは難しいであろう。すなわちラテン語のこの 2 例の交替に見られる共通点は現在と完了の母音における長短という関係のみであり、これは長短という固定化してしまった型に従って形成されたに過ぎず、本来のアプラウトとは無関係である可能は否定できないであろう。この点については Sihler (1995: 582) の力説するところでもある。

さらに 6 類の Gmc *a* ~ *ō* そのものがすべて時制の変化に伴う印欧祖語の真のアプラウトを継承し反映するものなのかどうかは疑わしいと思われる。むしろ時制の変化におけるこの固定的で半ば形式化されてしまっているとも思える交替とは別に、真のアプラウトに由来する可能性が考えられるのはむしろ 6 類の強変化動詞外の同根語かもしれない。

以下、主に Seebold (1970) に基づき、しかも印欧語族以外の語族に由来するもの、すなわち借用語はないということを大前提に、6 類の強変化動詞外の同根語の実例に見られる交替 *a* ~ *ō* に真のアプラウトを求め、本

来のその階梯について可能な限り考察した上で、強変化動詞としての交替 a ~ ō の成立過程に迫ることにしたい（ただし古英語に ō の実例がない場合には、可能であれば他のゲルマン語の実例を代用する）。

Gmc *far- (OE faran) < IE *por- (Gk poreúomai 'reise', Gk póros 'Furt') : OE fær 'journey', OE faru 'journey', OE ferian 'to carry' (Go farjan)、OE fierd 'Zug, Miliz' (OS fard, OHG fart, ModHG Fahrt)、OE farop 'Strömung'。Gmc *fōr- : OE fōr 'journey', OE fēran 'to go, journey' (OS fōrian, OHG fuoren 'to lead, to convey', ModHG führen)。そして他の語派ではあるが、e- 階梯 IE *per- に由来する同根語に Gk perāō, peirō (< *perjō) 'dringe sich' もある。従って理論的には Gmc *far- ~ *fōr- は IE *por- (o- 階梯) ~ *pōr- (延長階梯) を反映していることになる。

Gmc *al- (OE alan) : OE eall 'all' (OS, OHG all, ModHG all, Go alls) < Gmc *alna-)、OE eald 'old' (OS ald, OHG, ModHG alt 'old', Lat altus 'hoch', Gk ántalos 'unersättlich') は IE *X₂el- に由来する。Gmc *ōl- : ON øll 'zu nähren' (形容詞)。古英語には実例なし。従って理論的には Gmc *al- ~ *ōl- は IE *X₂el- (e- 階梯) ~ IE *X₂ēl- または *X₂ōl- (延長階梯) を反映していることになる。

Gmc *bak- (OE bacan) : OE gebæc 'Gebäck'。Gmc *bōk- : 実例なし。他の語派では Gk phógō 'ich röste, brate' がある。従って理論的には Gmc *bak- ~ *bōk- は IE *bhX₃g- (ゼロ階梯) ~ *bhoX₃g- (o- 階梯)、または IE *bhog- (o- 階梯) ~ *bhōg- (延長階梯) を反映していることになる。

Gmc *kal- (OE calan) : OE ciele 'chill' < POE *ceali < Gmc *kaliz, OE ceald 'cold' (OS cald, OHG, ModHG kalt, Go kalds)。Gmc *kōl- : OE cōl 'cool', OE cōlian 'kühl, kalt werden' (OS cōlon)、OE cēlan 'to cool' (OHG kuolen, ModHG kühlen) < WGmc *kōljan。他の語派には e- 階梯 IE *gel- に由来する同根語 Lat gelu 'Frost, Kälte', Lat gelāre 'gefrieren', Lat gelidus, Gk gelándros 'kalt' もある。従って理論的には Gmc *kal- ~

*kōl- は IE *gol- (o- 階梯) ~ *gōl- (延長階梯) を反映していることになる。

Gmc *gal- (OE galan) : OE nihtegale ‘nightingale’ (OS, OHG nahtigala, ModHG Nachtigall)、OE gealdor ‘Zauberlied’ (OHG galtar, ON galdr)。Gmc *gōl- : OE orgol ‘Stolz’ (OHG urguol ‘auffallend, besonders’)、Go gōljan ‘to greet’。正確な階梯は特定できない。

Gmc *grab- (OE grafan) : OE græf ‘Höhle’、OE grafu ‘Höhle’。Gmc *grōb- : OHG gruoba, ModHG Grube, ON gróf, Go grōba ‘Grube’。古英語には実例なし。他の語派で同根語と思われる e- 階梯 Lett grebju, grebt ‘aushöhlen’ から判断すると、理論的には Gmc *grab- ~ *grōb- は IE *ghrobh- (o- 階梯) ~ *ghrōbh- (延長階梯) を反映していることになる。

Gmc *hlaþ- (OE hlaþan) : OE hlæd ‘Last’、OE hlædel ‘ladle’、OE hlæst ‘Last’ (OHG last, ModHG Last) < Gmc *hlaþstiz。Gmc *hlōþ- : ON hlōpa ‘beladen, belasten’。古英語には実例なし。ゲルマン語派以外の同根語と見られるものとしては Lith klóju, klóti ‘hinbreiten, ausbreiten’ があり、Austefjord (1987: 169) は Gmc *hlaþ- は IE *klX₂t- (ゼロ階梯) に、*hlōþ- は IE *kloX₂t- (o- 階梯) に由来するとしている。

Gmc *sak- (OE sacan) : OE sacu ‘Streit’、OE sacian ‘streiten’。Gmc *sōk- : OE sēcan ‘to seek’ (OS sōkian, OHG suohhen, ModHG suchen, Go sōkjan)、OE sōcn ‘Untersuchung’ (Go sōkns)。そして Gmc *sak- は Lat sagāx ‘scharfsinnig’ に、また Gmc *sōk- は Lat sāgīre ‘spüren, wittern’、Gk (Dor) hāgéomai ‘führe’ < IE *sāg- に対応するとされる。従って理論的には Gmc *sak- ~ *sōk- は IE *sX₂g- (ゼロ階梯) ~ *sāg- < *seX₂g- (e- 階梯) または *sōg- < *soX₂g- (o- 階梯) を反映していることになる。

Gmc *wad- (OE wadan) : OE wæd ‘Furt’。Gmc *wōd- : ON óþr ‘durchwatbar’。古英語には実例なし。正確な階梯は特定できない。

Gmc *gnag- (OE gnagan) : 古英語には実例なし。*gnōg- : 実例なし。しかし他の語派では Lett gñēga < IE *ghneX₁gh- (e- 階梯) が同根語と

考えられることから、理論的には Gmc *gnag- ~ *gnōg- は IE *ghnX₁gh- (ゼロ階梯) ~ *ghnōgh- < *ghnoX₁gh- (o-階梯) を反映していることになる。

Gmc *drag- (OE *dragan*) : OE *dræge* ‘Schleppnetz’ < Gmc *dragōn. Gmc *drōhtaz : OE *drōht* ‘Zug’. 正確な階梯は特定できない。

Gmc *wak-n- (OE *wæcnan*) : OE *wacu* ‘Wache’, OE *weccan* ‘to awake’ (Go *uswakjan*), OE *wacian* ‘wachen’, OE *wacor* ‘wachsen’, OE *wacol* ‘wachsen’. Gmc *wōk- : Go *wōkains* ‘Wachen’. 古英語には実例なし。しかし Lat *vegere* ‘beleben’ が e-階梯の同根語と考えられることから、理論的には Gmc *wak- ~ *wōk- は IE *weg- (e-階梯) ~ *wōg- (延長階梯) を反映していることになる。

Gmc *sta-n-d- (OE *standan*) : 前述のように、これはゼロ階梯の IE *stX₂- を反映するものである。Gmc *stōd- : OE *stōd* ‘Pfosten’ (ON *stóp*). 理論的には Gmc *sta- ~ *stōd- は IE *stX₂- (ゼロ階梯) ~ IE *stā- < *steX₂- (e-階梯) または *stō- < *stoX₂- (o-階梯) を反映していることになる。

Gmc *wahs- (OE *weaxan*) : OE *wæstm* ‘Wuchs, Gestalt, Frucht’ (OS *wastum*) < Gmc *wahstmaz. Gmc *wōhs- : ON *óxla* ‘großmachen’ < Gmc *wōhsilō-. 古英語には実例なし。他の語派では Gk *awéksō* ‘mehrere’ が同根であると考えられることから、理論的には Gmc *wahs- は o-階梯を、Gmc *wōhs- は延長階梯を反映していることになる。

Gmc *slah- (OE *slēan*) : OE *slagu* ‘Schlag’, OE *slaga* ‘Mörder’, OE *slege* ‘Schlag’ (OS *slegi*, OHG *slag*, ON *slagr*) < Gmc *slagiz, OE *slegel* ‘Plektrum’ (OHG *slegil*, ModHG *Schlegel*) < Gmc *slagilaz, OE *sliet* ‘slaying’ < Gmc *slahtiz. Gmc *slōh- : ON *slōgr* (形容詞) ‘verschlagen’, ON *slōgr* ‘Vorteil’. 古英語には実例なし。正確な階梯は特定できない。

Gmc *flah- (OE *flēan*) : 実例なし。Gmc *flōh- : 実例なし。しかし他の語派では Lith *plėšiu*, *plėšti* ‘reißen’ < IE *pleX₁k- が同根であると考えられることから、理論的には Gmc *flah- ~ *flōh- は IE *plX₁k- (ゼロ階梯) ~

*ploX₁k- (o- 階梯) を反映していることになる。

Gmc *lah- (OE lēan) : OE leahtor ‘Fehler, Sünde’ < Gmc *lahtraz。
Gmc *lōh- : 実例なし。他の語派における同根語として Seebold (1970 : 321) は OIr locht ‘Schuld, Fehler’ を挙げており、これが同根語として正しいければ、理論的には Gmc *lah- ~ *lōh- は IE *lok- (o- 階梯) ~ *lōk- (延長階梯) を反映していることになる。

Gmc *stap- (OE steppan) : OE stapa ‘Heuschrecke’, OE stapo ‘pillar’。
Gmc *stōp- : OS stōpo ‘Tritt’, OHG stufo ‘Stufe’。古英語には実例なし。
正確な階梯は特定できない。

Gmc *swar- (OE swerian) : OE andswaru ‘answer, reply’, OE swara ‘Schwörer’, OE āpswird ‘Schwur’ (OHG eidswart)。Gmc *swōr : OS andswōr ‘Antwort’。古英語には実例なし。正確な階梯は特定できない。

Gmc *hlah- (OE hliehhan) : OE hlagol ‘apt to laugh’, hleahtor ‘laughter’。
Gmc *hlōh- : ON hlōgia ‘zum Lachen bringen’, ON hlōgi ‘Verlachung’, Go uflhōhjan ‘auflachen machen’。古英語には実例なし。正確な階梯は特定できない。

Gmc *skap- (OE *scieþþan > scyþþan) : OE sceapu ‘Verletzung’ < Gmc *skapō, OE sceapa ‘Schädiger’ (OS skatho ‘Schädiger’, OHG skado ‘Nachteil, Last, Schaden’, ON skapi ‘Schaden, Verlust’) < Gmc *skapōn。
Gmc *skōþ- : ON skóþ ‘Schaden’, ON skóþr ‘schädlich’。古英語には実例なし。しかし他の語派では Gk askēthēs ‘unversehrt, wohlbehalten’ が同根とされることから、Gmc *skap- ~ *skōþ- は理論的には IE X₁ (ゼロ階梯) ~ oX₁ (o- 階梯) または IE o (o- 階梯) ~ ō (延長階梯) のどちらもとも解せるであろう。

Gmc *haf- (OE hebban) : OE hefig ‘heavy’, OE hæft ‘captive’ (OHG haft)。Gmc *hōf- : OE behōf ‘Behuf, Nutzen’ (MHG behuof, ModHG Behuf), Go gahōbains ‘Enthaltbarkeit’。他の語派での同根語として

は Lat *capiō* ‘nehmen, ergreifen’, Gk *káptō* ‘schnappen, schlucken’, Gk *kópē* ‘Griff’ などが挙げられるが、語根母音の Gmc、Lat、Gk *a* がゼロ階梯と *e*-階梯のどちらに由来するのかははっきりしない。従って正確な階梯は特定できない。

以上のような分析からも改めて明らかなように、6類の強変化動詞としての交替 *a* ~ *ō* は時制の変化に伴う本来の一律のアプラウトを純粹に反映しているわけではなく、6類の強変化動詞はもともと印欧祖語のアプラウトのいくつかの系列が混合して成立したものであることが改めて確認できたのではないだろうか。

それではどのような過程を経て6類の *a* ~ *ō* ~ *ō* ~ *a* が成立したかについて考察してみたい。

Austefjord (1987) は、起源のばらばらな Gmc *a* を語根母音とする多くの動詞の中のある動詞が牽引役となって6類という1グループが成立したと考える。その動詞とはまず Gmc *a* がゼロ階梯に、そして Gmc *ō* が *o*-階梯に由来する動詞であり、中でも彼は意味的に見て使用頻度が非常に高かったと思われる IE **stX₂-* (現在形 OE *standan*、ON *standa*、Go *standan* ‘to stand’) ~ **stoX₂-* (過去単数 OE *stōd*、ON *stōþ*、Go *stōþ*) ~ **stX₂-* (過去複数) ~ **stX₂-* (過去分詞 OE *standen*、ON *staþinn*) に注目している。

Feuillet (1981: 207) はその過去が *e*-階梯の IE **steX₂-* に由来するとしているが、Austefjord (1987: 169) の主張するように、過去単数は1~5類の過去と同様 *o*-階梯、すなわち IE **stoX₂-* に由来すると見るべきであろう。Austefjord (1987: 169) によると、OE *standan* : *stōd* の関係はアプラウトのほか鼻音挿入辞の有無の点では Lat *findō* : *findī*、Skt *bhinadmi* : *bibheda* ‘split’ に相当するが、本来は現在時制のものである鼻音挿入辞が過去分詞 (OE *standen*) にも見られるのは現在時制の影響によるものであり、現に ON *staþinn* はその本来の発達を正確に反映しているという (従って

古英語の場合も過去分詞は OE *stæden となるのが本来の発達であるということになる)。ただ、現在時制の鼻音挿入辞に後続する歯音、過去時制における語根母音後位置の歯音 d、þ の起源については明確な説明がなされているとは言い難い。

Austefjord は牽引役となった考えられる動詞としてさらに語根が Gmc *aC- < IE *X₂eC- であるものにも注目し、その例として Gmc *akanan 'to drive' (< IE *X₂eg-) を挙げている。この場合、過去時制において元来は語根母音が単数では o- 階梯、複数ではゼロ階梯であってもすべて現在時制と同じ Gmc a となってしまう、このタイプの動詞の現在時制と過去時制との間の語根母音の交替はいったんは完全に失われていたと思われるのに対し、*standanan は現在と過去単数とを識別するはっきりしたアブラウトの Gmc a ~ ö をもともと有していたが、現在と過去複数の語根母音が同一の Gmc a であるという弱みもあった。すなわち最初の段階では、現在形 *ak- (e- 階梯) ~ 過去単数 *ak- < *X₂og- (o- 階梯) ~ 過去複数 *ak- < *X₂æg- < *X₂g- (ゼロ階梯) ~ 過去分詞 *akanaz < *X₂æg- < *X₂g- (ゼロ階梯)；現在形 *stand- (ゼロ階梯) ~ 過去単数 *stōd- (o- 階梯) ~ 過去複数 *stad- (ゼロ階梯) ~ 過去分詞 *stadanaz (ゼロ階梯) という 2 つのタイプがあったことになり、両者が互いに影響し合ったのだという。すなわち、その過去単数と過去複数がどちらも同じ母音 a を有するという前者の特徴と、その過去単数のみが異なる母音 ö を有するという後者が互いに影響し合った結果、a ~ ö ~ ö ~ a という型が成立するに至り、語根母音 Gmc a が IE o に由来する動詞も結局はこの型に合流したという。ただし、Austefjord が使用頻度の高い *stX₂- と並んで牽引役として挙げている *X₂eg- の強変化動詞としての変化形は実際にそれ以降の段階ではあいにく古英語では実証されず、ON aka ~ ók ~ óku ~ ekinn に見られるのみであり、ゲルマン祖語において *stX₂- とともに *X₂eg- の使用頻度が実際に牽引役となれるほどのものであったかどうかはわからない。

Voyles (1992: 269) は Gmc a ~ \bar{o} ~ \bar{o} ~ a の起源には深く立ち入ってはいないが、彼は *stand- の n が現在時制の鼻音挿入辞であるとする従来の見解とは異なり、*stand- という形は IE *stā- (Gk (Dor) hístāmi ‘stand’) < IE *steX₂- プラス現在分詞の接辞に由来すると考え、*stā- は athematic な動詞であったため、現在分詞の接辞 -nd- が IE \bar{a} > Gmc \bar{o} の変化に先立ち語根に直接付加されることにより *stānd- となり、さらに \bar{a} が -nd- の前で短化され、6 類の語根母音と同一の a となった結果であるとしている。また現在分詞ではないにもかかわらず -nd- の付いた不定詞が誕生したのは、語根 *stā- だけでは強変化動詞として組み込まれる際に通常の形態素構造からは逸脱したものになってしまうためとしている。しかし仮に語根末子音のない形であっても *stā- は後に Gmc *stō- となり、7 類に組み込まれることによって強変化動詞として成り立つことも不可能ではなかったのではないだろうか。すなわち強変化動詞として成り立つための条件が必ずしも -nd- の存続であったとは言い切れないと思われる。

Voyles は n を伴わない過去形については、*stā- プラス t が Gmc *stōþ- となったと述べるにとどまっていて、付加された t の起源については何も述べてはいない。しかしいずれにせよ、結果として過去時制は、ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語に見られるような現在時制にのみ鼻音挿入辞を本来有する動詞にあたかも由来するかのように、鼻音挿入辞 n のない形となっている。

Voyles の見解をそのまま受け入れた場合、*standanan とその過去形における Gmc a, \bar{o} はいずれも IE \bar{a} に由来し、印欧祖語におけるアプラウトとは元来まったく無関係であったということになる。

あるいは Voyles の提案のうち現在分詞の接辞 -nd- の付加という見方のみを認め、その付加がなされたのは現在時制のゼロ階梯に対してであり、過去形はあくまでも o- 階梯であったという解釈も可能であるかもしれない。

さらに 6 類について新しい提案を行なっているのが Mailhammer (2007:

94-97) である。彼は $a \sim \bar{o} \sim \bar{o} \sim a$ の成立の出発点となった動詞は Gmc *aC- (< IE *X₂eC- と *X₃eC-) という語根のものであったと考え、その例として、前記の Gmc *ak- ‘to drive’ に加え、*al- ‘to nourish’、*an- ‘to breathe’ (Lat anima ‘Hausch, Atem, Leben’, animus ‘breath, spirit’, Gk ánemos ‘wind’, Skt aniti ‘atmet’) (< IE *X₂en-) を挙げている。しかし前述のように、*ak- の実証例は ON aka のみである。そして *an- についても 6 類としての実証例は過去形の Go uzōn ‘verschied’ (‘hauchte sein Leben aus’) のみである。従って、このタイプの動詞についてはゲルマン諸語ではもはや実証例が乏しいにしてもゲルマン祖語の段階では使用頻度が高かったであろうことが前提でなければならないであろう。

それでは Mailhammer の見解に沿って 6 類の成立について考えてみたい。

IE *X₂eg- は過去の単数と複数のいずれも重複 (reduplication) を伴い、o-階梯の IE *X₂eX₂og- もゼロ階梯の IE *X₂eX₂g- もともに Gmc *ōk- となった。過去分詞 *akanaz は本来はゼロ階梯の IE *X₂gonos にそのまま由来するものかもしれないが、ゲルマン祖語では喉音 X₂がいったんは何の痕跡も残さずに消失し、語根母音のない *kanaz のような逸脱した形となってしまう、5 類の例えば *gbanaz > *gebanaz ‘given’ のようなケースと同様に語根母音として現在形の a が二次的に挿入された結果とも考えられる。

もう 1 つ注目すべきものは、語根母音の後位置に喉音を有したと思われる例えば OE bacan ‘to bake’ ~ bōc ~ bōcon ~ bacen、すなわち Gmc *baka- (< IE *bhX₃g-) ~ *bōk- (< IE *bhebhX₃g-) のタイプであり、*bōk- は過去単数の規則正しい発達形であると考えられる。ゼロ階梯の過去複数 は本来ならば第 1 音節以外の喉音が規則的に消失した結果、IE *bhebhX₃g- > *bhebhg- > *bk- のような逸脱した形になってしまうため、実際には類推的に単数から \bar{o} が導入された。そして過去分詞 *bakana- は IE *bhX₃g-ono- からの規則正しい発達であろう。

すなわち *aka- : *ōk- : *ōk- : *akana- = *baka- : *bōk- : X : *bakana- 、 従

って X = *bōk- となる。

これは Mailhammer (2007: 84) が 5 類の過去複数の長母音についての説明に用いたのと同様の視点であり、モデルとして挙げられた動詞の牽引役としての使用頻度の高さについての問題はあるにせよ、同様の視点で 2 つの疑問、すなわち 5 類と 6 類の過去形の長母音を説明している点は注目すべきであろう。

Austefjord の理論では Mailhammer が重視する重複 (reduplication) をまったく考慮せずに a ~ ō ~ ǫ ~ a の成立は *stX₂- と *X₂eg- との相互影響の結果であるとしていたのに対し、Mailhammer の理論では重複と喉音を大前提に語根が Gmc *aC- < IE *X₂eC- である動詞をモデルとした理論であった。しかし 6 類の強変化動詞外の多くの同根語が示す a ~ ō は 6 類でのような類推的な産物ではなく、本来のアプラウトの結果であると断言できるのかどうかという疑問も感じられる。むしろ逆に 6 類として成立した a ~ ō が影響を及ぼしたもののなのであろうか。さらに Mailhammer (2007: 172-173) によると、6 類の 3 分の 1 強が非印欧語起源のものであるという。もしそうであるとすれば、問題はさらに複雑で難解なものとなるであろう。

参 考 文 献

- Austefjord, A. 1987. “Das präteritale ō der 6. Ablautreihe des Germanischen.” *IF* 92, 168-171.
- Brunner, K. 1965³. *Altenglische Grammtik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Feuillet, J. 1981. “Quelques problèmes de morphologie verbale germanique.” *BSL* 76, 201-221
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.

- Mailhammer, R. 2007. *The Germanic strong verbs: foundations and development of a new system*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 森 基雄. 2000. 「古英語強變化動詞 (Ⅰ)」『奈良産業大学紀要』第16集, 129-137.
- 森 基雄. 2001. 「古英語強變化動詞 (Ⅱ)」『奈良産業大学紀要』第17集, 123-132.
- 森 基雄. 2004. 「古英語強變化動詞 (Ⅲ)」『奈良産業大学紀要』第20集, 61-68.
- 森 基雄. 2007. 「古英語強變化動詞 (Ⅳ)」『奈良産業大学紀要』第23集, 59-68.
- Quirk, R. & C. L. Wrenn. 1957². *An Old English grammar*. London: Methuen.
- Rix, H. 2001². *Lexikon der indogermanischen Verben*. Wiesbaden: Reichert.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Sihler, A. L. 1995. *New comparative grammar of Greek and Latin*. New York-Oxford: Oxford University Press.
- Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic grammar: pre-, proto-, and post-Germanic languages*. San Diego, etc.: Academic Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.